

ベッドに腰掛けたプロンデインにスポットライト。何か考え事でもしている様子。

ドアを叩く音。

プロンデイン「誰？」

カルロ「(舞台の外で) いいですか？」

プロンデイン「誰だい？」

カルロ「お邪魔してもいいですか？」

プロンデイン「遅いよ、今寝るところ、誰だい？」

カルロ「ちよつと、大事なことを言いに来ただけ。俺のこと知らないと思います」

プロンデイン「まあいいだろう、入れよ」

カルロ、入って来てドアのところに立つ。

プロンデイン「ああ、サイン欲しいんだな、ペンあるかい？」

カルロ「サインは、もうあるんです」

プロンデイン「もうあるのか。それでこんな時間に何しに来た？」

カルロ「お話したいことが」

プロンデイン「名前は？」

カルロ「カルロ」

プロンデイン「カルロ、何？」

カルロ「カルロだけ、苗字は無し」

プロンデイン「あ、そう。カルロ。俺のオムレツ料理の腕前を見て、お

祝いを言いに来てくれたんだな。さあ、握手だ」

カルロ「玉子、八つだけでしたね？」

プロンデイン「知ってたのか？」

カルロ「十二個じゃなかった。十二個と宣伝しておいたくせに、八個だ

った。望遠鏡で見ていたんです」

プロンデイン「その通り、八個だけだった」

カルロ「でも宣伝では十二個、一ダース。死の一ダース。ペテンでした

ね」

プロンデイン「(カルロに向かって非常に真面目に) そう、だろうね」

カルロ「一種の詐欺ですよ。見物料金が五ドル」

プロンデイン「詐欺か。そう確かに。でもカナダの方から見てても良かったんだぜ、あっちならタダだ」

カルロ「でも、外国でしょ。俺はパスポートがないんだ」

プロンデイン「成程、それだけ？」

カルロ「そう。それを言いに来た、詐欺だって。約束したことは果すべ
きです。前宣伝して料金とるなら、なおさらです。みんな抜けてま
すからね。俺しか気がつかなかった。でもあんたは分かってる、誰
の数えないって。俺は望遠鏡で数えてた。あんた、手に汗が滲んで、
足が震えてた。でも、あんたみんなを夢中にさせるの、名人だもの

ね」

プロンデイン「(やわらかく) 分かったよ、ここから出て行ってくれ」

カルロ「今度から約束したことは守るって言うってください、それだけで
す」

プロンデイン「分かったから」

カルロ「あんたのつな渡り全部見てるんだ。俺がガキのころから」

プロンデイン「じゃ、何回やったか知ってるな？」

カルロ「昨日のオムレツを入れると、十七回。一度、調節のつなを切ら

れたことがあつたら」

プロンデイン「それが？」

カルロ「犯人を見た。ブルーのシャツにヒゲの男だ。走って逃げたな。

ポリスが追っかけたから」

プロンデイン「お前がポリス呼んだのか？」

カルロ「俺じゃない、女性だ」

プロンデイン「惜しかったな、お前に命を救ってもらうとこだったのに

な」

カルロ「じゃ、約束は守るんだぞ」

プロンデイン「でないと、可哀想なカルロがっかりさせる、だろ？」

カルロ「誰も見に来なくなる。あんたがペテン師だと知ったらな」

プロンデイン「お前が言いふらすんだろ？」

カルロ「だろうね」

プロンデイン「お休み、カルロ」

カルロ、黙って出てゆく。

プロンデイン、カルロが去った後を見送る。

2

次の日。

ドアを叩く音。

プロンデイン「……どうぞ」

カルロが一冊の本を持って入ってくる。

プロンデイン「ああ、カルロ。今日は何だ？」

カルロ「この本を見せたくて」

プロンデイン「本？」

カルロ「体育の本。人間の体には大切な筋肉が三百八十五もある。その

筋肉を鍛える方法が載っている、どう、興味ある？ あんたにプレ

ゼントする」

pronدين 「どういうことだ？」

カルロ 「あんたの役に立つから。平衡運動へいじゆうも、集中運動だつて沢山載っ

ている」

pronدين 「面白そうだな」

カルロ 「またお目にかかれてよかった。じゃ」

pronدين 「ちょっと待て、俺のつな渡を全部みてるんだな？」

カルロ 「ああ」

pronدين 「つまり、この本は、もっと上手くなれと言うことか？ 玉

カルロ 「さあ……何か、もっと誠実なこと。何か本当に、自分の体の、

可能性を試してみる、自分の能力を、勇気を。もっと価値のあるわ

ざを見せて欲しいと思って」

pronدين 「例えはどんな？」

カルロ 「つなの上を走って渡るとか、片足で、逆立ちして……」

プロンデイン「馬鹿を言え？」

カルロ「オムレツを作る、ヒゲをそる、新聞を読む。みんな日常家に居てすることを、あなたはナイヤガラの滝の上でやる。そりゃ観客は喜ぶでしょう。でも、実際は床の上でやるのと同じぐらい簡単なのさ」

プロンデイン「そんなことはない」

カルロ「あんたにとっては簡単なのさ」

プロンデイン「じゃ、今度は走って渡るか」

カルロ「そう、それで、この本持って来たんだ。しっかり準備するよ
にね」

プロンデイン「(皮肉に)サンキュー、せいぜい勉強するよ」

カルロ、じっとプロンデインを見つめて、

「あんた、あんたは飛べるんだけどな」

プロンデイン「何だって？」

カルロ「いまに飛べるさ、飛べるのはあんただけだ。もちろん練習すれ

ばだけどね。飛びたいなら、飛びたいと決心すれば、いつかナイヤガラだって渡ることだって出来る、つな無しで」

ブロンディン「(皮肉) 本当にそう思うか？」

カルロ「もっと自由に、もっと軽く、もっとつなから離れて、渡るようになるってことを言ってるんだ。俺が望遠鏡で見ると……時々つながら、陽の光に反射して見えない、あんなだけが見える。空中に浮かんで、まるで空気の中を歩いている。いつかきつと、何てことなくカナダへ渡っちゃう時がくる、つなも、支え棒も無く、その時こそ！ あんたは鳥だ、神様なんだ」

ブロンディン「(微笑んで) ああそう？」

カルロ「考えたことない？ 出来るよ、あんた」

ブロンディン「うん、考えた、考えたよ。子供のころから、飛びたかった。つなの上に一人だけ、光る空気と、太陽。そう川の流れも聞かせる。そんな時、つなから離れて歩いて行けるような錯覚に陥る。

何処へでも行きたい方へ、川を見下ろし、木々を見下ろし、海に着

く、そしてジグザグに、何処へでも行きたい方へ、ちよつと立ち止まって一休み……また歩き出す。空には何千という見えないつなが無限に張り渡されている。俺は一番遠くへ運んでくれるつなを探しながら、空を、どんどん太陽に向かって、永久に歩き続ける」

カルロ「それ、俺が言ったとおり」

pronデイン「時たま、出来そうな気がして、立ち止まる。だが、やっぱりつなの上だ。そして地上へ無事着くんのだ」

カルロ「まだ、準備が出来ていないんだ」

pronデイン「ほつとすると、思うか？」

カルロ「何が？」

pronデイン「地上に無事着いた時」

カルロ「もちろん、そうじゃないでしょ。あんたは空中にいる時の方が気持ち良さそうだ。あんたの本領だもん。あんたなら飛べる」

pronデイン「いいや、ほつとする。世界一般の人と同じだ」

カルロ「怖い？」

プロンデイン「いや、落ちることは考えない。今、自分のやっていることを考える。次の一歩をあとどれだけ残っているかってことを……風のこと、足や腕のこと……でも一番考えるのは、いろんな思い出がよみがえる。幻影。昔、会った人。人に言われたこと。子供のころのこと、もうすっかり忘れていたことや……夢のように、本当にあったことなのかわからないこと。だがはつきり見える。声を聞き、話をし、時々歌も唄う」

カルロ「つなの上にいるのが嬉しんだ」

プロンデイン「そう、信じられない程の嬉しさが体の芯から突き上げてくる……そして、したくなる」

カルロ「何を？」

プロンデイン「飛び込みたくなる」

カルロ「ハア？」

プロンデイン「でも、止める」

カルロ「そりゃ、そうでしょう」

ブロンディン「ひどく怖い」

カルロ「当たり前だ」

ブロンディン「飛ぶなんて不可能だ」

カルロ「聞いて、方法がある。まず俺が持って来た本を準備する。足だけじゃなく、体に三百八十五ある筋肉を一つ一つ鍛える。しかもバ
イオリンの弦げんのように、軽く、分かる？　そして、最初につなを今
より少し速く渡る。それからもつと速く。さらに速く走る。飛ぶぐ
らい。次ぎに身体全体を空中で支えるための練習に入る。片足でつ
なを支え、もう片足は空中へ、いつしか片足で体を空中で支えられ
るようになる。そして両足が空中を支える時がくる。ある日、あ
んたが言ったように何処へでも歩いて行けるようになる。あんたどう
思う。忍耐が結果を生む」

ブロンディン「お前さん、頭がおかしいよ」

カルロ「あんたが言ったことだよ」

ブロンディン「馬鹿げたこった。つなの上でひよいと浮かんで来ただけ

さ。不可能だ」

カルロ「世間一般の人にとってはね。でも、あんたにとっては不可能じゃない」

プロンデイン「誰にとってもだ。自然の法則はだな……」

カルロ「いいかい、鳥だって飛んでるんだ」

プロンデイン「そう、飛んでるんだ。空中を歩いているんじゃない」

カルロ「同じことだ。鳥は飛ぶようにできていて飛ぶ、人間は歩くようにできていて歩く。あんたには翼がないからな。翼が欲しいなんてのは望みすぎってもんだ。だから、あんたは空中を歩く。もし、あんたが歩きたければね」

プロンデイン「お前、完全に狂ってんな」

カルロ「俺は科学者だ。あんたが空中を歩きたくないのは、その気がないか、俺の言うことを信じないかのどっちかだ」

プロンデイン「すまん、お前の言うことは信じない。重力の法則を考えたって……」

カルロ「全ての法則には例外がある」

プロンデイン「どうして俺が例外にならなきゃならんのだ？」

カルロ「世界中で、ナイヤガラをつな渡を十七回もやり遂げたのは、あんた唯一人だ。それこそ例外中の例外だ」

プロンデイン「俺の肉体は肉と骨でできている、翼はないし、生えても来ない。体重七十キロ。つながなきゃ、どうしようもない、川に落ちるだけだ。千年お前の方法を練習しようだ」

カルロ「試したくない？」

プロンデイン「ない」

カルロ「そうですか。実は、あんたを説得できるとは思っていなかった。

ちよつとしたアイデアだけさ、実現可能だったけど。でもあなたに会って気がついた。あんたが興味があるのは……空を飛ぶことじゃなく、もってお他のことだった」

プロンデイン「その通りだ」

カルロ「(あきらめて)じあ……一つお願い。せめて、ごまかしの宣伝は

やめてよ、ね。何か本当にもっと……。分かるでしょ、俺が言いたいこと。みんなが拍手してくれてもあんたは満足できない。あんたが後でびっくりして、『どういう風にやったんだ？』『どうやって出来たんだ？』って自分に訊ねる、そういうことこそやってみる価値があることなんです。その他のことは単なる三文芝居だ」

プロンデイン「いいよ。ご御忠告、頂いとこう」

カルロ「いずれにしても、本置いて行きましょうか？」

プロンデイン「うん。いいの？」

カルロ「もちろん。じゃ、どうも、話を聞いてくれてありがとう。私のアイデアが分かってもらえてうれしいよ。いくら気違いじみてたとしてもね。さようなら」

カルロ、出てゆく。

2

二日後。

プロンデイン、カルロが置いていった本を読んでいる。

ドアを叩く音。

ロンディン「開いてるよ。カルロか？ どうぞ、どうぞ」

カルロ、入ってくる。

ロンディン「おはよう」

カルロ「どうして、私を探し出したの？」

ロンディン「まあ、座って。さあ」

ロンディン、カルロに椅子をすすめる。

二人、向き合って坐る。

ロンディン『『どうして、あんたを探し出した』って……簡単さ、新聞の広告のところを見たんだよ。“科学者”の欄。あんたの名前が載っていた、『カルロだけ、苗字無し』って」

カルロ「真面目に話そうよ」

ロンディン「真面目だよ。昨日一日と今日、君を探し回った。ついに教えてくれたよ。私についての本を書いてる人だ、とね」

カルロ「誰がそんな事を言ったの？」

プロンデイン「何故？」

カルロ「嘘だ……嘘っぱちだ！ 私は道楽としてあんたに興味があるだ

け……つまり、本を書く様な興味じゃない。科学者の眼で見た軽業に興味がある。人には飛べる可能性があるかという、そんな興味さ、

誰でも関心持つような。あなたを人間として……」

プロンデイン「関心ないね、あんたの言うことには」

カルロ「どうして、私を探したの？」

プロンデイン「ちよっと提案があるんだ」

カルロ「どんな？」

プロンデイン「職業的な」

カルロ「言ってみて」

プロンデイン「よく考えてみるんだぞ」

カルロ「心配ご無用」

プロンデイン「すごく危険なんだ」

カルロ「分かっています。あなたはナイヤガラを二人で一緒に渡ろうって

言うんでしょ。私があなたの肩に乗って」

プロンデイン「何で、分かったんだ？」

カルロ「当たり前だよ」

プロンデイン「何で？」

カルロ「今ピンと来たの……偶然の一致さ」

プロンデイン「私はどうせあんたが……」

カルロ「前代未聞だと、言うと思ったんでしょ。とんでもない」

プロンデイン「分かった、あんたには当たり前だと思えたんだ」

カルロ「その通り」

プロンデイン「それじゃ、やってみるか？」

カルロ「やってみよう」

プロンデイン「確かか？」

カルロ「あんた以上に」

プロンデイン「よし！　じゃ一つ、あんたの……」

カルロ「支え棒は二本？　それともあんたの一本だけ？」

プロンデイン 「支え棒は一本だけ」

カルロ 「二本の方が良い今も……」

プロンデイン 「各自がそれぞれ自分のバランスを？」

カルロ 「あんた、家族がいる？」

プロンデイン 「いや」

カルロ 「私も」

プロンデイン 「孤児か？」

カルロ 「まあ」

プロンデイン 「練習をつまなくちやな」

カルロ 「各自に支え棒は一本ずつ。私がおもり錘の代わりなんで嫌だ」

プロンデイン 「しかし、そうだとすれば、もう……」

カルロ 「私は分かって言ってるの」

プロンデイン 「何ですって？」

カルロ 「旦那さん、居るの？」

プロンデイン 「ボーイ・フレンドなら何人かは」

カルロ「特別な親しい人は？」

pronデイン「今はいない」

カルロ「私も」

pronデイン「川の流れの速さ、知ってるか？」

カルロ「時速三十五キロ」

pronデイン「高さは？」

カルロ「川の上五〇メートル。正確には、四八メートル、真ん中の所で」

pronデイン「つな渡りを差し引いて、だ」

カルロ「その通り」

pronデイン「今何歳」

カルロ「忘れた」

pronデイン「男（女）もいない？」

カルロ「居たけど」

pronデイン「何かあった？」

カルロ「つな渡り、いつにしようかな？」

プロンデイン 「さー、夏ごろか。二人とも確信持てる時」

カルロ 「二人一人みたいに動けなくてはね」

プロンデイン 「そう」

カルロ 「一つ一つの動きを分析する、筋肉一筋ずつの動きを。もし万一、

落ちる瞬間だつて分析しとかなくちゃ」

プロンデイン 「そうだ」

カルロ 「心の動き、呼吸、バランス、風の打ちつける具合も」

プロンデイン 「私と一緒に渡る君を、君のボーイフレンドは見に来るだ

ろうね」

カルロ 「来ないよ。洋服と宝石にしか興味がなかった」

プロンデイン 「来るよ。みんな来る」

カルロ 「そんなの、関心ない」

プロンデイン 「何に、関心があるんだ？」

カルロ 「科学。あなたは、自分の責任を、完全に理解している、と私は

思う」

ブロンディン「そうだよ」

カルロ「にもかかわらず、私に、あえてそれを提案する。あえて私の命を自分の手に引き受ける。自分の足にね、つまり、そのことについて、じっくりと考えたんでしょうか？」

ブロンディン「もちろん」

カルロ「いつ考えたの？」

ブロンディン「昨日さ、私を非難したろ、君はこの前の……」

カルロ「そうか、オムレツ食べるのと違うって訳？」

ブロンディン「違う、ちよつと違う」

カルロ「多分、途中で……私一人で、空を歩いて行きたくなっちゃうかも……残念だろうね。あんた一人で終らなくちゃなんない。すごく羨ましくなってるね」

ブロンディン「あんたの足にぶら下がって行くだろうさ。途中で、一人残るなんてまっぴらだ」

カルロ「ちよつと教えて。どうしてナイヤガラを渡る気になったの？」

ブロンディン「五歳の時か。危なっかしい事が好きだね」

カルロ「あんた全然恐くないの？」

ブロンディン「もし月と太陽の間をつなを張れるなら、渡って見せるさ、

二の足なんか踏むものか」

カルロ「下を見ずにね……」

ブロンディン「もちろん」

カルロ「悪くないね。でも最初はつなの束を抱えて太陽に歩いて行かな

くちやね」

ブロンディン「イカルスは、うまく行かなかった」

カルロ「イカルス？ 馬鹿なやつさ、理論をよく勉強しなかったから、

墜落しちまったんだ。太陽がロウを溶かしてしまうことぐらい誰で

も気がつくのに、ロウで翼なんか作っちゃって！ 馬鹿なこと。私

らみたいに歩いて行けばいいのに……でも、こっちはナイアガラの

つな渡りだ」

ブロンディン「ナイアガラの滝の上には風がある、凄い風だ」

カルロ「何も怒りっこないよ、私の方法なら、私に説明させて……」

プロンデイン「方法なんてクソ食らえ！ 空中を歩くんだってやってやる。鼻唄まじりで、肩車して、何だってやれるさ！」

カルロ「問題は……」

プロンデイン「死にやいいんだろ、死にや！ いやカルロ、絶対にいかん、私は責任をとれないし、あんたは誰も信用するな。忘れろ。もうこの話はやめだ」

カルロ「ええ、私も責任をとらされるのは嫌。私のせいで、あんたが死ぬことだってあるんだから」

プロンデイン「決まった、もう忘れろ」

カルロ「ええ、忘れましょう、忘れられたらね」

プロンデイン、二つのコップにリキュールをつぐと、一つをアルロに渡す。

カルロ「……本当に五歳の時から軽業を始めたの？」

プロンデイン「そうだ、フランスのサーカス団でね」

カルロ「両親も軽業師だったの？」

ブロンディン「ああ……つまり養父母はな」

カルロ「じゃ、実の親は？」

ブロンディン「四ヶ月の私を置き去りにした。(ゆっくりと他のことを考

えている風に)村へ下りてつちまった。ある晩、みんなはそのまま

次の目的地に進んでったさ。番人が、鼻をたらしして一人で泣いてい

た私を見つけてくれた。団長は二人が追っかけて来るもんだと思っ

てた。赤ん坊のために返って来るのものとね。私は毎年毎年軽業師

の馬車に入れられ親が変わっていった。何人ぐらいか、もう忘れち

まったがね」

カルロ「で、実の親は？」

ブロンディン「それっきりさ。そういうこと。五歳の時にはもう有名に

なっていた。フランスじゅうの新聞に私の写真が載ったよ。新聞を

見て、私たちが実の親ですと名乗り上げることも出来た筈だ。そう

は思わないか？」

カルロ「そりやそうですよ」

pronデイン「もう死んじまったんだろ。いろんな曲芸師たちが、私に芸を教えてくれた。そして私はサーカス団の所有物でね。子供のいない夫婦が養子にくれと言ったが、団長は駄目と言った。そりやそ
うさ、十二の時、私は金の卵だったからな」

カルロ「面白い話ね」

会話はゆつくりと続く。

pronデイン「で、君の方は？」

カルロ「何を話せばいいの？」

pronデイン「君の両親は？」

カルロ「おやじは死んじまった。母は再婚した。私は一人で生活している」

pronデイン「体重は何キロ？」

カルロ「ねえ、やりたければ、渡りましょう」

pronデイン「そのことについては忘れろ、言っただろ」

カルロ「私はあんと渡りません。いや、そうじゃない。私が言いたいのは、ここに第三者の軽業師をつくり出すということ……渡るのはあんたでも私でもない、二人一緒でもない、別の人。二人半分ずつ……第三者の軽業師、その人がナイヤガラを渡るってこと」

ブロンデイン「なあ、カルロ……」

カルロ「(耳を貸さずに) だから、あんたの考える全く違ったタイプの練習が必要なの……こと肉体的、技術的なもの他に精神的なものが必要な……命がけで危険を冒す。身体の強い人間でなくちゃならない。調和の取れた、性格もよく噛み合っていて、特に大馬鹿者でなくては。それが肝心。そうじゃないと、わたしたちが当面している危険に気がついた時、途中でつなから下りてしまうか、恐くなくて飛びおりてしまかも知れない……そうでしょ。イカルスって名前にしてもいな」

ブロンデイン「イカルス？」

カルロ「あの、愚か者に敬意を称して」

プロンデイン「いいだろう、イカルスか。名前は決まった（しばらく両者軽く笑っている）もう決心してみたんだな」

カルロ「始める前に私と二つ三つ約束して下さい」

プロンデイン「何を約束して欲しいんだ？」

カルロ「私たちだけではやれない。無理だと言うことは分るね。つまり

イカロスが必要な、イカルスだけが渡れるってこと、じゃない？」

プロンデイン「うん、その通りだ。他に方法はない」

カルロ「じゃあ、いいですね。まず第一に、イカルスに与える私の練習

方法をいつも受け容れること。どれほど馬鹿げていると思っても。

次に、軽業に関する全てのことを私に教えてくれること。私もイカ

ルスに教えるために」

プロンデイン「いいだろ。君の練習方法て言うのはどういうのだ？」

カルロ「まだ、分らないこれから考える。もう一つ」

プロンデイン「言ってみて」

カルロ「渡るか渡らないか、決めるのは私だってこと」

プロンデイン「申し分なし」

カルロ「いつ、イカルスになるかは、私が決めます」

プロンデイン「いいだろう、君が決める」

カルロ「本気？」

プロンデイン「本気さ」

カルロ「二つの条件も？」

プロンデイン「二つとも」

カルロ「手を差し伸べて」 厳粛に誓いますか？

プロンデイン「厳粛に誓ます」

カルロ「(退場しかけ、プロンデインを見つめ) 私は本当に嬉しい。四歳

の時から望遠鏡で眺めていて、そして今……あんたは気がついてく
れた」

プロンデイン「……ずっとこのアイデアを持っていたんだ？」

カルロ「ええ、小さい時から信じていた。あんたに頼んだら、私を肩車
してナイアガラを渡ってくれるって」

プロンデイン「二人で渡ろう、近いうちに」

カルロ「私が決めますよ？」

プロンデイン「ああ、君が決める」

4

三週間後。

プロンデインが新聞や雑誌の切り抜きを集めたものを整理している。

その一枚（ポスター）を手に取り読む。

プロンデイン『全世界にその名も高きフランスの軽業師、プロンデイン

は、再びその技で皆様をあつけにとらせるであります。ナイア

ガラの滝の真上に張り渡る一本のつな。その危険きわまるつなの上

で何と玉子を十二個も割り……』

カルロ「八個！」

プロンデイン「……」その玉子で、プロンデイン風オムレツを作り、食

べてお目にかけます。身の毛もよだつ、頼るものなき空中で、風と

筋肉と精神に全てを託して……』

ポスターを壁に貼り付け、

プロンデイン「どうだ、なかなかイケてるポスターだろ」

× × ×

ナイヤガラの滝の轟音が響きわたる。

カルロ「私たちは今ナイヤガラに張られた綱の上だ。そしてプロンデ

インの肩の上に私がいる」

プロンデイン「気分はどうだ？」

カルロ「あんたは？」

プロンデイン「いいよ」

カルロ「私もいい気分だ。(自分に向かって) 落ち着いてやるためには、

やろうとする意志がなくえはならない。私にはその意志がある」

プロンデイン「(自分に向かって) 少しずつ、気にしなくなる。慣れて来

る。どんな高さも恐なくなる時が来る」

カルロ「下を見ずに、ね、プロンデイン、上を向いてもいいの？」

プロンデイン「当たり前さ！」

カルロ「プロンデイン、見てかもめだ！」

プロンデイン「自分の今やっていることを考えている。次の一步を、あとどれだけ残っているかを。風のこと考える」

カルロ「時々綱が陽の光に反射して見えない。あんたなら飛べる」

プロンデイン「……川の上を、ジグザグに、どこへでも行きたいところ

へ、空には何千という眼に見えない綱が無限に張り渡されていて、

私は歩いて行ける、まるで……」

カルロ「第三者の軽業師だ。あんたでも私でもない、別の人。強い奴で、

よく調和がとれていて、性格も噛み合っている、イカルス。そもそも

う一人の大バカの名誉にかけて、プロンデイン、イカルスのことど

う思う？」

プロンデイン「イカルス？」

カルロ「どう思う？」

プロンデイン「大した奴だ！」

カルロ「あんたは私の方法を受け入れてくれた。プロンデイン、どうも

ありがとう！」

プロンデイン「ありがとうは、あんたに、だ。素敵な散歩になるだろうな。プロンデイン、わたしは慎重にやらなくては」

カルロ「周囲は、風だけ」

プロンデイン「わたしは世界一の軽業師だ、空中には決して落ちない」

カルロ「光る空気と太陽だけ、綱から離れて歩いて行けそうだ。プロンデイン、あんたは詩人だ」

プロンデイン「お前もだ！ 私はプロンデイン、と一緒なら落ち着いて行ける、プロンデイン」

カルロ「ごらんよ、プロンデイン。あのかもめ、空中に止まっている。

プロンデイン、恥しくないの？ だだのかもめさえ出来る、だのに世界一の軽業師が出来ないなんて？」

プロンデイン「もし、プロンデインが私を納得させて、もし、私が落ちたら、プロンデインは自分を許さない」

カルロ「プロンデイン、飛べるよ！」

プロンデイン「カルロ！」

カルロ「プロンデイン」

プロンデイン「もうすぐ真ん中だ！ 青い点が見えるか？」

カルロ「全て忍耐と着実さの問題だ、全て……いよいよオムレツを食べる時が来た」

プロンデイン「まだ、引き返せる」

カルロ「昔、勇気をためして線路で汽車を待っていた。でも、汽車が来る前に私は逃げた。次の日家の壁に弱虫と書いてあった」

プロンデイン「この足は誰のだ？ もしお前が死んだら誰のせいだ？」

カルロ「あと一〇メートル！」

プロンデイン「何だ？」

カルロ「真ん中まで、青い点だ！」

プロンデイン「そうだ。いや、わたしは責任を取りたくない」

カルロ「プロンデイン、どうしたの？」

プロンデイン「こわいんだ！」

カルロ「プロンデイン、何故、プロンデイン」

プロンデイン「お前のせいだ」

カルロ「プロンデイン、あんたは世界一だ、私はよく知っている。大

丈夫だ、前に進め、あんたは世界一勇気のある軽業師だ。さあ、大

声で叫ぶんだ！」

プロンデイン「わたしは世界一の軽業師だ」

カルロ「わたしは決して落ちない。さあ、繰り返して、馬鹿のプロンデ

イン、前に進めない臆病者のプロンデイン。もう怖くて口もきけな

いの？ わたしは絶対に落ちない。大声で！」

プロンデイン「わたしは絶対に落ちない」

カルロ「もっと強く」

プロンデイン「絶対に！」

カルロ「太陽まで一緒に歩いて行こう、プロンデイン！」

プロンデイン「……よし、太陽まで……」

カルロ「
プロンデイン「
カルロ「
プロンデイン「
カルロ「
プロンデイン「
カルロ「
プロンデイン「
カルロ「
プロンデイン「
カルロ「
プロンデイン「
カルロ「
プロンデイン「
カルロ「
プロンデイン「

カルロ「

プロンティン「

カルロ「

プロンティン「

カルロ「

プロンティン「

カルロ「

プロンティン「

カルロ「

プロンティン「

カルロ「

プロンティン「

カルロ「

プロンティン「

カルロ「

「プロンデイン」

「カルロ」